The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	越境する悪態 : ロシア語の被検閲言語、マットの修辞的空間の人類学的考察
Author(s)	岡本, 由良
Citation	年報人間科学. 2006, 27, p. 33-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25867
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

越境する悪態

―ロシア語の被検閲言語、マットの修辞的空間の人類学的考察―

岡本　由良

〈要旨〉

本論文ではロシアのいわゆる非検閲言語層、「マット」を考察し、その使用によって成立する特殊な修辞的空間を一つの発話内行為として再定義する。膨大な語彙からなるマットはロシアにとどまらず、旧ソ連諸国、中国やモンゴルにまで進出し、現地語と混ざり使われている。「マット」はロシアでキリスト教が普及する以前に儀礼の言語として役割していたと推測されており、儀礼のとき以外の使用はタブーであった。キリスト教の普及とともに、マットは邪教の名残として位置づけられ、その日常的使用に対するタブーがさらに強化された。今ではマットは抑圧された怒りを表すための抑圧された表現として常識的に理解されており、この理解はマットに関する数少ない学術的論文でも受けいれられている。本論文ではマットが使われたいくつかの会話と一つのインタビューを分析し、この見解の妥当性に疑問を投げかける。会話の文脈、会話における会話者の役割分担、話し手と聞き手の間の力学に注目することで、マットが作り出す特殊な修辞的空間を明らかにする。最後にマットを理解する新たな構図を提唱し、マットを一つの発話内行為として捉えなおす。

キーワード

罵倒語、発話内行為、修辞、会話分析、〝マット〟

序論

旧ソ連の十五の共和国のどこに行っても、ロシア語の罵倒の言葉、「マット」(mat) を必ず耳にする。アルメニア語、ブリャト語、ラトビア語の会話の只中で、ロシア語の悪名高い卑語「フイ」(huj)(男性性器)、「ピズダ」(pizda)(女性性器)、「イェバチ」(jebach)(性交する)や、それらに接頭辞と接尾辞をつけた数々の悪態が姿を現す。旧ソ連のみならず、モンゴルや中国でもマットが現地の言葉に混ざり、使われていると旅行者がいう。ロシア語話者との交流があった民族すべての言語に、しかも語族の壁を越えて、マットが浸透している。

ロシアで生まれ育った筆者が異国の地でマットをはじめて聞いたのは、1991年に旅行でラトビアのある漁村を訪れたときのことである。旧ソ連の中でも独立の運動が最初から強かったバルト三国のエストニア、ラトビアとリトアニアがこの年に他の共和国に先立ち、ソ連から独立した。筆者がラトビアを訪れたのは独立承認数ヶ月前のときであった。ソ連軍がラトビアに武力行使をし、首都リーガで血の日曜日事件が発生したあとのことである。反露感情が頂点に達しており、筆者が訪れた村の人々はロシア語を話すことを拒んでいた。しかし、ラトビア全土で激しい反ソデモが行われたこの狂乱の時期でも、マットだけは通常通り使われていたのである。敵国の言葉であるにもかかわらず、マットは生き延びたのである。マットのこの異様な根強さには何か不可解なものがあった。

ロシアのコンテキストにおいても、マットを位置づけることは決して容易ではない。ロシアではマットは何世紀にもわたって抑圧されており、社会主義時代が終焉を告げるまでマットに関する学術的論文が出版されることがなかったほど、マットに対する検閲が厳しかった。そのために、マットに関する議論は現時点ではまだ初歩的な段階にあり、マットの表現を類型学的に整理する言語学のものと、その儀礼的ルーツを探求する民俗学のものが主流をなす。実際の会話データに基づいてマットを考察した論文はなく、他言語への浸透の問題はもとより、現代ロシアの日常会話におけるマットの役割も全く不明瞭である。

ラトビアの独立から13年がたち、2004年に筆者がフィールドワークでラトビアの別の村を訪れたとき、マットが依然として使われていた。「ラトビア語の悪態では足りないのか」とラトビア人に聞くと「マットでないといけないときがあるんだよ」と彼らが答えた。しかし、「マットでないといけないとき」はいったいどういうときか。この問いには答えは得られなかった。

本論の目的はこの「マットでないといけないとき」、つまりマットのもつ「発話内の力」を探求することにある。一つの悪態の形式がなぜ越境し、イデオロギーと対抗するほど根強く定着するかを明らかにするためにはまず、マットによって成立する行為を定義しなければならない。本稿ではマットが単なる悪態でないことを示した上で、マットを使うことによって確立する特殊な会話的空間を明ら

かにしていく。

本稿を三つの章から組み立てる。

第一節では、マットがいかにロシアにおいて語られ、抑圧され、罰せられるかを紹介するとともに、マットに関する先行研究をまとめる。二章では、マットを大量に使ったことで広く知られた一つのインタビュー、ロシア極右政治家で自由共和党党首のジリノフスキー氏の2002年に行われたインタビューを詳細に分析し、マットがもつ発話内の力に関する仮説をたてる。そして三章では筆者がラトビアで収集した会話データと照り合わせながら、二章で立てた仮説を検証し、マットに関する人類学的議論を展開する。

1　定義

マットとはおそらくどの言語にもある悪態に当たるものである。ただし、ロシアの悪態マットは少なくとも二つの側面、つまり言語学的な諸特徴と体制との関係という二つにおいて、注目に値する。まず、それぞれの側面におけるマットの特殊性を明らかにする。

1．1　体系

言語学的な側面に関していえば、マットは公の場にふさわしいと考えられているロシア語と明確に区別できる・される語彙である。マットは上述の三つの語幹を根本とし、ロシア語に豊富にある接頭辞や接尾辞をその語幹に付け加えることによって、非常に多くの単語を生み出す体系をなしている。「フイ」、「ピズダ」、そして「イェバチ」に加えて男性性器を意味するもう一つの単語、「ムダク」と、売春婦を意味する「ブリャッチ」もマットの領域に所属すると考えることが妥当である。単語自体は以上の意味をもっているが、語幹に接頭辞や接尾辞をつけることによって意味が変わり、語幹と無関係に、第一に接頭辞や接尾辞が持つ意味的な値と、第二に会話のコンテキストによって、付与される。

例えば、性交を意味する「イェバチ」に接頭辞の「ポド」を付け加えてできる「ポドイェバチ」は「からかう」という意味で使うことが多い。あるいは男性性器の「フイ」に動詞の接尾辞「ヤリチ」を足せば、様々な目的語を持つ英語の do にあたる動詞となる。女性性器のピズダに動詞の接尾辞「イチ」を足せば、「殴る」、「話す」、「嘘をつく」など、文脈によって異なる意味の単語となる。文法上の分類でいえば、マットは動詞に限らず、名詞、形容詞、副詞、感嘆詞などの、前置詞以外のすべての形で用いられる。

マットの分類を試みている Levin の論文、「ロシア語の猥褻な表現について」[Levin 1998] では、マットの表現が大きく二つのクラスに分類されている。一つは「それ自体として独立した発話内行為、すなわち、罵倒の発話内行為的な力を持っている行為」である。そしてもう一つは「代用的な猥褻表現であり、基本的には独立した発話行為として成立せず、一般的な表現、あるいは一般的な表現の一部をより表現力の豊富なものに置き換えるための同意語」である。レビンは第二のクラスの表現をさらに二つのクラスに分けている。

つまり、1）代名詞と代動詞：語幹は意味論的に空虚であり、意味は文脈、そして接頭辞や接尾辞によって定まる単語と、2）意味論的な値を持つ単語や慣用句である。

マットの語彙は決して辞書に収まる有限の単語集合ではない。確かに、三つの語幹だけは変わらないが、接頭語と接尾辞のつけ方に対する制約は通常の言語領域よりもはるかに緩く、新たな単語の生成の範囲は非常に広い。たとえば、ペレストロイカが始まり、新たに唱えられた言論の自由とともにマットに対する取締りが若干緩くなった1987年ごろの言語学オリンピックでは次の課題があった：「乗用車がトラックと衝突事故を起こし、トラックから運転手が降り、乗用車の運転手に次のように話しかけた：「そそっかしいあなた、私は今からあなたの顔を強く殴らせていただきます」。この文章をロシア語からマットへ訳しなさい。ただし、

1．語幹は一つだけを使用すること

2．前置詞は例外とする」（この記述はその年のオリンピックに中学生枠で参加した筆者の記憶に基づく）

筆者の記憶では正解と認められた回答は少なくとも三つあった。つまり、課題の文章に含まれている副詞以外のすべての単語：「そそっかしい」、「あなた」、「顔」、「強く」、「殴る」は皆、マットの語幹に適切な接頭辞と接尾辞をつければ訳しうるということである。しかも、訳し方は何通りもあり、あらかじめ定まっていない。ゆえに、マットは例えば英語の悪態のように、有限の語彙ではなく、一つの生成法を根本とする言語体系である。

もちろん、体系内には意味論的な変動の少ない単語（例えば、「威張る」、あるいは「メンチ切る」の意味しか持たない「ヴィヨビヴァシャ」（vijobivatsja））などもあり、これらの語彙はソ連崩壊後現れ始めた卑語辞典に収集される。しかし、新たな言葉が常に作られ続けられていることも事実である。マットで巧みに話すことはある種の芸術としてロシア人の語りにおいて現れることがしばしばある。そのとき、マットの達人に期待されるのは多くの表現を単なる知識としてもつことではなく、体系の規則に従いながら新たな言葉を生み出す一種の創造性である。巧みに新たなマットを作りながら話す者こそ、マットに関する定番のジョーク：「私は二ヶ国語が話せる。普通のロシア語とマットロシア語」を体現するといえよう。

1．2　マットと体制

マットに対する検閲は非常に厳しく、書かれたものにはそもそも「マット」という総称自体は使われず、「nezenzurnije virazenija」、つまり「検閲されるべき表現」、あるいは「nenormativnaja leksika」、すなわち「非規範的な語彙」という表現が一般に使用されている。マスメディアや小説はもちろん、上述のように学術的な論文においてさえマットを研究対象にして、例としてあげることがつい最近までは禁じられていた。これは社会主義時代だけの現象ではなく、革命以前の王政時代でも同じであった [Mokijenko 1994]。基本的なマットだけを掲載したダーリ編ロシア語大辞典は例外的な成功だが、この辞典もやはり出版の際に多くの一般人、さらには言語学者から

厳しい非難を浴びせられ、革命後の第二版のときにはマットはすべて排除されていた。ペレストロイカ以前にマットが含まれた書物はすべてアンダーグラウンドで流通した自作物か、または外国の出版物だけであった。

マットに対する抑圧は検閲にとどまらず、法律にも組み込まれている。ロシアの刑法上、マットを使うことは二つの法律によって罰せられうる。一つは名誉毀損罪であり、これは刑法上二つの項目で定義されている：

1．屈辱的な発言が公の場でなされた場合

2．屈辱的な発言が被検閲的な表現を使ってなされた場合

つまり、一対一の会話で一般的なロシア語で相手に対する屈辱的な発言をしてもかまわないが、それを非検閲的な表現でした時点で、相手に起訴されうる。

さらには行政法で発言の内容と関係なく、マットそのものに対する項がある。これは「公の場における被検閲的な表現」という項目で、刑罰として15日間までの監禁が定められている。法文では公の場でマットを使うことを「社会に対する軽蔑の意を明らかに含んでおり、社会的秩序に反する、意図的な行為」として評価されている。いいかえれば、制度上、マットを使うことがその修辞的な特性ゆえに罰せられるに値する法律違反行為として位置づけられている。これを考慮に入れれば、「マットを言う」行為はただ単に発話行為ではなく、発話内行為として近年のマット研究に位置づけられていることは不思議ではない。

マットを追放しようとする動きは権力構造の周辺に位置する機関でもみられる。たとえば、いくつかの地方政府が最近、日本の「ノーマイカーデイ」のように「ノーマットデイ」を企画した。一つの地方では一日中マットをまったく使わずに過ごせた市民に特別に製作された勲章が授けられた。学校でマットを使った生徒に実験的に罰金を課す学校も増え始めている。さらにインターネットの掲示板の規則ごとにも決まって上述の行政法に似た二つの禁止項目が設けられている：1）屈辱的な発言の禁止、2）被検閲的な語彙の禁止。ロシア正教も古くからマットを根絶しようと励んでいた。マット自体にとどまらず、マットの同音異義語や音声学的に近い言葉も祈祷から排除しなければならないという主張がでたほどである。マットが「野蛮な慣習の名残だ」というのが彼らの伝統的な論拠であったが、近年では心理学の用語が論拠として使われることも増え、「悪態が心の病」といったスローガンも聖職者の作るホームページなどで現れる。筆者が調べた限りでは、権威に訴えながらマットを擁護しようとする動きは皆無に近い。

1．3　マットに関する語りと先行研究

以上の厳しい検閲や刑法上の制限にもかかわらず、マットはロシア語の日常会話に欠かせない現象である。ロシアのあるロックグループは「ロシアのマット」という名前の曲で次のように歌う：

「おいらはマットとともに生まれ、マットとともに生きるんだ。マットとともに物心がついたし、マットとともに死ぬんだ。マットを母

乳と一緒に吸収したんだ…将軍も、店の店員も、検察官も父親達もみんなマットをつくんだ。皆外に出れば聖人のように振舞うくせに、家に行けば三語に一つはマットに決まっている」。

2004年にサンクトペテルブルグで行われた世論調査の結果では、ペテルブルグ市民の69.3%がマットを使うと答え、そのうち20.1%が一日一回以上マットを使っていると答えた。マットは一般的に「文化的な」（クリテゥールニイ）ロシア語の反対の極にあると考えられており、多くの場合反社会的なイメージを持っている。にもかかわらず、マットは基本的に特定の社会層や職業層とは結びつかず、例えば犯罪組織のスラングには上述の語幹が含まれない。逆にいわゆる「vor v zakone」「直訳すれば「法に生きる泥棒」、つまり、犯罪者の法律を知り、それに基づいて生きるもの」はマットを使わない。さらに、マットの反社会的なイメージに反して、世論調査のアンケートに対して年収の比較的高い人々、たとえば警察官や軍人、ビジネスマン、実業家などがマットを多く、そして家の外で使う[通信社レグナム　2004]。

民俗学の資料によるとマットは古くからスラブ民族の言語の一部をなしており、2001年にビリキイ・ノフゴロッドで発掘された12世紀の白樺樹皮のマニュスクリプトにマットの言葉が書かれていた。マットはキリスト教以前の諸信仰において呪術的な力をもつとされ、日常的な使用には制限がかけられていたと推測される。マットは主として男性の言葉であり、女性の使用は禁じられていた。一つのフォークセオリーでは、男は神に道を訊かれたときに丁寧に道を教えたが、女は神の質問に答えず、神をマットで罵ったため、それ以降マットを使うことを禁じられたのである。

マットは多くの儀礼でも使われたとされる。豊穣祭、結婚式、種蒔きなどのときにマットを使った悪態をいわければならなかったという。また、マットは「オベレグ」、つまり厄除けとしても機能していた。たとえば森の悪魔、「レシイ」、家の壁の中や屋根裏部屋に潜む「ドモヴォイ」、吸血鬼などから身を守るために人々はマットを使った[Uspenskij 1994]。さらに、身近な人を危険から保護するために、彼・彼女をマットを使った悪態で罵ることは今でも一般的である。たとえば子どもが大学の入試試験を受験する際、あらかじめに試験の始まる時間と終わる時間を確かめた親が試験の間、子どもをマットで罵る。

ならば、マットが日常言語と明確に区別されていることも、体制から抑圧されてきたことも、そして悪態としての機能を持っていることも、過去の儀礼的な役割に由来すると考えてよいだろうか。マットの空想の歴史を作ろうと思えば、次のような物語が作れよう。つまり、マットはキリスト教以前に儀礼的な言語として機能しており、公の場での使用はタブーであった。10世紀以降のキリスト教の浸透の再、マットが邪教が残した一つの野蛮な慣習として神学者によって位置づけられ、抑圧される。マットをサタンの言語として位置づけた神学者の立場は王政時代の政府にも受け入れられ、マットを追放する動きが刑法に組み込まれ、制度化する。体制によって抑圧される言語層が抑圧されればされるほどその反社会的な性質を増し、

腹の底の怒りを表現するために使われるようになる。

以上のような物語は常識的な理解と繋がりやすい。例えば、2001年に出版されたベストセラー、「罵倒の戦場—社会問題としての悪態」の著者 V. ジェルビスは儀礼→抑圧→悪態の三項からなるマットの歴史を新聞などのインタビューで発表し、その論点は少なくともロシアのインターネット上で広い反響を呼んだ。筆者が覚えている限り、マットで話すこととは「抑圧された気持ちが抑圧される修辞によって表される」という風に、もっぱら怒りの表現として理解されていた。たとえば、モキエンコはマットを「例のない汚い悪態」として描き、ロシア人論に欠かさず現れる「ドゥシャ」（心）がロシアの第二の象徴である「ラズルハ」（衰退、荒廃）に耐えられなくなり、怒りとむなしさを吐き出す「一番効果的な方法」として捉えているのである。彼が言うには、「悪態をつく人は昔ながらの伝統的な方法で自分のロシア的な心を吐いて、人生、人々、そして政府に対する不満を（マットによって）表している」[Mokijenko V. 1994, p.56]。

上で少し触れたレビンの論文でもマットの描く世界が反社会的であると指摘される。彼の分類の内、第二クラスの二番目の範疇（意味論的な値を持つ単語や慣用句）に入る語彙は主として否定的な単語からなっていることが強調されており、彼はこの主張を男性性器を意味する「フイ」を使った慣用句や女性性器の「ピズダ」を語幹に持つ言葉を例にとって示す。例えば、

1. フイが冷蔵庫で寝泊りした＝食べ物がない
2. 俺をフイとも考えていないのか？＝俺を全く尊敬していないのか？
3. それはフイちゃんだよ＝断る
4. ピズダする＝殴る
5. 完全フイする＝怯える
6. フイを打ち込む＝あきらめる
7. フイ叩け＝どうでもいい

などなどである。レビンいわく、マットは主として何かがないとき、何かが必要ないとき、望ましくないその他の否定的な意味で使われることが多い。

彼の論文は次の文章で締めくくられている：

「本論文で上げた語彙、特に第二のクラスの言葉が描写する世界は容易に想像できよう。この世界では人々が盗み、だまし、殴り、怯え、すべてが横領され、裏切られ、売られる。この世界では転んでも立ち上がることがない、取ることがあっても、返すことはない、人々は働いても、くたくたになるまで働きすぎるか、手抜きをするか、とにかく仕事、その他の物事、そして周りの人々に対して嫌悪感か無関心の気持ちしてもたず、最後にはすべてが完全たるピズデツを迎える」[Levin 1988, p.818]。

「ピズデツ」という言葉だが、これは「コネツ」、つまり「終わり」という意味の単語の語尾だけを女性性器の語幹につけたもので、「終わり」という意味で使うことができる言葉である。

マットに関するこれまでの記述（これをマットの日常的な理解と

呼んでも良いが）をまとめよう。マットは儀礼的な言語層として日常の言語から独立し、儀礼以外の使用はタブーであった。キリスト教の普及とともに邪教の名残としてマットがさらに抑圧され、タブーは強化される。今ではマットは抑圧された怒りを表す抑圧された表現として常識、体制、そして学術世界で位置づけられている。この見解は妥当に聞こえるが、二つの点において説得力を欠いている。まず、この見解は単語単位、慣用句単位の分析によって導き出されているため、必ずしもマットの日常会話における役割を説明できると限らない。そもそも、マットの意味論的な側面は上述のように非常に流動的であり、同じ単語がコンテキストによって相反する意味でも使われうる。例えば、レビンが否定的な意味のマットとしてあげた「ピズデツ」はしばしば感嘆詞として使われ、「ピズダ」（女性性器）を語幹に持つ他の単語の多くも賞賛、感動を表現するものである。このように、会話データを分析し、コンテキストの中でマットを理解しなければ、いかなる意味論的な考察も的外れになりかねない。

二つ目の問題はマットを罵倒として捉えること自体の妥当性である。マットは罵倒の言語であるならば、罵倒の方法がいくらでもある他の言語にマットがなぜ輸出されるかが説明不可能である。ラトビアの村人の言う「マットでないといけないとき」は明らかに単なる罵倒、怒りとは異なる領域の存在を指し示している。この領域の特性を把握するために単語や慣用句の意味論的分析は不十分であり、より大きな文脈においてマットを捉えなおす必要がある。本論文では一つのインタビュー、そしていくつかの会話例に依拠しながら、マットが作り出す修辞的空間を見出していく。

2．ジリノフスキー氏のインタービューにおけるマットの修辞。

2．1　インタビュー

ここで分析対象となるのはロシア極右政治家で自由共和党党首ジリノフスキー氏のインタビューである。このインタビューは2002年の∞月ころにイラクで撮影されたもので、マットを頻繁に使ったことで一般人の興味を引き付けて非常に有名となり、インタビューの映像がインターネットに流出し、即座に広まった。同時にマットを公的な場で使ったことで、ジリノフスキー氏は体制側から厳しく批判された。

5分弱のインタビューにおいてマットが使われるのは36回で、629にも上る総単語数と比べれば圧倒的に少ない。逆に、ほとんどの言葉が様々な接頭辞や接尾辞を付与されたマットの五つの語幹からなる会話が多い中、ここではある種の偏りが存在すると考えるしかない。あるトピックがマットを伴い、あるトピックは伴わない。このインタビューにおけるマットの振り分け方を調べれば、マットが単なる怒りの表現、罵倒の表現か、それとも何らかの特徴を持った修辞的領域をなしているかが分かるはずである。以下で会話の大まかな流れと主要なポイントを抑えた上で、振り分け方をみていく。

2．2　分析

一人語りの形をとったこのインタビューの話題は米国大統領に執着しており、G.W.ブッシュへのメッセージとして構成されている。ジリノフスキー氏はブッシュ大統領の計画しているイラクへの攻撃に対して批判的であり、この戦争がブッシュの敗北に終わること、戦争に踏み込んだ場合ロシア、その他の国からの復讐が訪れることを力説している。ジリノフスキーは仇の戦争は必ず敗北に終わると指摘し、そのテーゼを証明するものとしてのレーニンやゴルバチョフの革命・改革を挙げる。また、現時点の両国家情勢に関して述べ、米国とロシアの比較をする。モニカ・ルインスキーとの不倫騒動で例証される米国の倫理的腐敗に対して、ロシアの高貴な文化がうたわれる。最後に兵器や軍隊の状況について話し、米国よりもロシアの兵器の方が優れていると指摘する。マットが出現する個所とそうでない箇所は以下の通りである。

まず、売春婦を意味するマットの「ブリャッチ」が最初に現れるのは、はじめてブッシュの父親への言及がなされたときである。レーニンの兄、ゴルバチョフの祖父に関する次の言葉も濃いマットに包まれている。当然、二人ともジリノフスキー氏から見れば「こっち側」の人間であり、罵られるべき対象ではないにも関わらず、感嘆詞の「ブリャッチ」がここで連発される。逆に憎むべきアメリカに関する次のいくつかの文や、アメリカを待ち構えているに違いない暗い未来についての記述にはマットが全く現れない。興味深いが、ここでは会話者二人（つまり「俺」と「お前」のジリノフスキー氏とブッシュ氏）の関係と別に、単にアメリカの現状に関する客観的な知識が述べられている。

それに対して、次の文では「お前のアメリカ」という新しい位置付けが行われ、「俺のロシア」に対する対照的な描写がジリノフスキーとブッシュの所属を強調して語られる。そのとき、そして次の「モニカとクリントン」で表されるアメリカの倫理的腐敗の話においても、「ほら見ろよ」という訴えかけが多く、いわば登場人物が全員この場に参加している、そこに立っているかのように語られ、時空間的な共有が成立する。マットがここにも出現する。

次のマットは「ジョージ、ジョージよ…バグダッドの空を見てみろよ」に現れる。その前の「ウェスタン映画を見てみろ」でも、その後の「ここの大統領、ここの国民をわれわれ（ロシア人）は知っているからあなたの勝利は不可能だ」というある種の因果論的な記述においてもマットは現れない。時空間の共有・非共有がマットの使い分けの一つのポイントとなっているようである。

マットが再び現れるのはフセイン氏とブッシュ氏、そして「他の皆」として称される諸国のリーダー達とブッシュ氏の関係を描く文においてである。フセインはブッシュを「見下し」、他の皆は「屈服する」。両方の単語はマットによって、あるいはマットとともに現れる。

最後にマットが出現するのはロシアとアメリカが揃ってグルジアの首都かオーストラリア大陸を爆破・沈没「させようか」という共

同作業の提案の際である。

以上がこのインタビューで出現したマットすべてのリストである。マットが現れている文脈に共通する特徴は何か。

2．3　仮説

インタビューにおけるマットの使用場面は皆、次の特長を持っている。マットが現れる文脈では

1．時空間的な共有が強調される

2．家族（実際の家族に限らず、「家族的な」ものも含まれる）に関する言及がなされる

3．役割、地位、威厳に訴えることがない

この三つに共通するのはなにか。ブッシュの父親への言及でマットが出現するのも、時空間的共有を強調する記述がマットに包まれるのも、未来への言及の際に共同性の強調としてマットが現れるのも一つの原理で統一されている。つまり、マットの使用は一つの非常に親密で平等的なつながりからなる共同体の存在を思わせるものである。ただし、現実の共同体と異なり、ここではいかなる社会的規約、いかなる威厳、いかなる権力も通用しない。いわば、村の対面関係のようなものである。マットが使われるときの会話的空間は体制の次元とも、また記憶にある共有経験の次元とも無縁である。この特殊な世界では現在性、直接性が中心となり、マットの空間に入り込める過去は実際の、あるいは擬似的な、平等な親類同士の関係に限定される。そして未来も極めて共同性の濃いものとしてしか現れない。

以上の分析で明らかになったように、マットは「罵倒の発話内の力」といった概念で括られうる単なる悪態ではない。マットは会話において悪態と異なるはっきりした特殊な空間を作り出す。その空間とは村での対面関係、つまり機関や地位を完全に会話から締め出したときに可能となる直接性、平等性、共同性の空間である。刑法でも謳われるマットの反社会性、被検閲性、非規範性はマットの儀礼的な役割に由来しているのではなく、また制度的な抑圧がそれを生んだわけでもない。マットそのものがその修辞的な特性上、地位や権威を認めず、社会的規約を破る曲者である。逆に、マットが修辞の次元においていかなる権威も認めないからこそ、体制が統制しようとするすべての公の場から排除されなければならない。

政府におけるジリノフスキー氏の役目は宮廷の道化師にあたる。従来の道化師と同様に、彼は過激な発言をし、大衆の考えを探らなければならない。このインタビューが仕込まれたものかどうかは分からないが、米国に対する過激な発言がどのような反響を呼ぶかがロシア政府にとって外政の重要な指標となったに違いない。そして、マットがジリノフスキー氏の言葉に相応しいというのも、彼のトリックスターとしての役割と関連しており、制度に身をおきながらも、制度が作り出す役割の束としての社会を超えること、村の対面性が統治する永久的な現在、「我々」、「家族」しか存在しない現在の一人であることを可能にするからである。

だが、このインタビューにおけるマットは他の解釈の余地を与え

ていないのだろうか。仮に、ジリノフスキー氏が以上のような役割を負わせられ、道化師という彼の役割上、意識的に上述の体面的な構図を作らなければならなかったならどうか。つまり、マットそのものには平等的な関係を作り出す性質がなく、マットは単なる強調という機能しか持たないと考えられないのだろうか。インタビューにおいて、マットはただ単に語る主体が強調したかった平等性の構図を際立たせていただけと考えられないだろうか。こういった意味では、上の分析は欠陥をもっている。

この欠陥を補うことが次の節の課題となる。ここではモノローグではなく、二人以上の参加者による会話のデータを使い、上の仮説を検証する。そこでまず、マットが作る世界が対面性の世界かどうかが明確にする。さらに、二人以上の参加者による会話でマットがどのように現れるかを分析し、マットを共同体内で使われる他の修辞的空間において位置づければ、マットの持つ社会学的な意味がみえてくるはずである。ラトビアの会話資料に基づいて、分析を進めていこう。

3　村での対面性を村で問う

これから紹介する会話の断片はラトビア共和国北西部に位置するブルトニエキ村で録音されたものである。まず、ここを調査地として選択した理由を述べておこう。

3．1　調査地について

ラトビアは1991年に急ソ連から独立したあと、学校ではロシア語に代わり、英語教育が推進されている。政策の面ではロシアを離れ、西欧の一部になるための動きが数多く見られ、2004年5月1日にラトビアがEUに加盟した。それにも関わらず、ラトビアの総人口の40%がロシア語を母語とし、多言語的状況は特に首都リーガ、そしてソ連時代に開設された工場を中心に成り立つ多くの地方都市、村落において一般的である。

ブルトニエキ村を選択した最大の理由はそのエスニック構成である。ブルトニエキではラトビア人のマジョリティ以外に、ウクライナ人、ベロルシア人、そして少数のロシア人が移り住んでいる。これらのマイノリティは基本的に村の最下層に位置し、殆ど例外なく肉体労働に従事している。ロシア人が比較的少ない多民族的環境においてマットがどのように使われているかを考えるには、この村が適していると筆者が判断した。

村の言語社会学的状況を簡単に紹介しておこう。明確な階級もなく、年齢層による社会的分類もアジアほど厳格でないロシアやラトビアでは個人が他の人々と二つの明確に区別される関係を持つことができる。一つは「ティ関係」（ラトビア語では「テウ」）関係で、もう一つは「ヴィ関係」（ラトビア語では「ユース」）関係である。前者は日本語の「君」や「お前」に対応しており、家族や友人に対して「ティ」で接することが一般的である。「ヴィ」関係は日本語

の敬語に対応する言語領域で、年齢的な差異、互いの身分や地位を強調する関係において使われる。ただし、「ヴィ」関係から「ティ」関係への移行は比較的簡単であり、「ティ」関係に移ると決めた二人が「ピチ・ナ・ティ」（直訳すれば「ティになるために飲む」）といわれる簡単な儀礼を行う。二人が酒（普通はウオツカ）の入ったグラスを持ち、互いの腕を交差させた形で酒を飲み干した後、三回口付けをするというものである、儀礼を行わずに、単なる話し合いで「ティ」関係に移ることもある。

「ティ」関係は年齢的に離れた者同士の間や、地位的に距離のある者同士の間でも十分可能である。相手が年上でかつ職場の上司であっても、お互いに信頼しあえば、二人は「ティ」関係に移動する。反対に「ヴィ」関係であまりにも長い間留まることの方が稀で、基本的に好まれない。ロシアやラトビアの権力にまつわる言説との関連でみれば、この志向は容易に理解できる。

ロシアとラトビアでは権力者も社会的弱者も同様に権力を外在的で、一時的なものとして位置づけることが一般的で、社会的役割と自分の間に距離を置くことがごく普通である。筆者がブルトニエキで出会った最下層の人も、新たな官僚層に選ばれた人もみんな、地位とそれに伴う役割を常に個人の持つ倫理感と利益と対照的に描いた。ブルトニエキでは制度が個人に与える損も利益も村落の外からくるものとされ、一時的で、不安定で、そして多くの場合に権力を握ったその個人の利潤に反するものとして語られる。それに対して社会的地位を越えたインフォーマルな「ティ」関係、個人対個人で築かれた信頼関係は持続するものとして想像されるのである。

3．2　会話と分析

以下紹介する会話の参加者全員が互いに「ティ」関係にある。会話は同じ日に録音されたもので、この日に16歳から24歳までの男性7人が夜の9時から夜中の1時くらいまで、ブルトニエキ城の廃墟の周りに広がる公園の中にある小さな島で酒を飲みながら話した。会話の参加者の職業、所属する民族集団は次の通りである。

ラトビア人：

B　材木切り出し人

G　長距離運転手

S　厩の常勤従業員

ロシア人

F　陸軍軍人、

ウクライナ人

A　高校生、かつ厩の非常勤従業員

P　無職（警察官志望者）

日本人

Yu　筆者

調査者以外の全員がブルトニエキ村で生まれ育ち、子供のときからお互いを知っていた。筆者も調査の6年前にブルトニエキを訪れ

たときに彼らと親しくなり、2ヶ月間にわたって殆ど朝から晩までまだ子供だった彼らと過ごしたため、全員と「ティ」関係を結んでいた。

一番目に紹介するフラグメントは会話が行われた公園で過去に起こった出来事についての会話である。会話の参加者何人かが橋に立っており、通りがかった犬に足をかけ、池に落としたという内容である。以下がそのトランスクリプトである。

- (G) 一人きたんや、この前…おっさん一人がな、原付できて、後ろ猟犬二匹…俺とBかな、あれ、Bと一緒に立っとったっけ
(ポーズ)
- (F) (ラトビア語で) あれ、俺やったで。
- (G) Fやったんか?ほんで、おっさんがこっち通って、Uターンしてな (ポーズ、笑い)。犬がこっち行って、あっち行って、一匹はすぐ彼の後を追ったけどな、で、もう一匹、こんなちっこいのが…
- (F) びびっとったんや、俺らが橋にたっとったからな
- (G) (前の文と重複) びびっとった、ほんで走り出して、そこで誰かは忘れたけど、俺?Fか?Bかもしれないけど、足ちょっと出してな、犬がコテン (全員が笑う)
- (S)
池に
- (F) で、走り出した (フイした)
- (G) 一瞬で消えたで…

ここでマットが出現するのは一回だけで、「走り出した」という意味を持たされているのは男性性器の「フイ」に動詞の接尾辞「ヤリチ」をつけたマットの言葉、「フヤリチ」である。この会話で注目に値するのは話し手が三回にわたり、物語に対する所有権を放棄しようとするところである。途上人物を覚えていないことを示し、出来事の描写の途中に突然止まり、そして最後に物語のオチも聞き手に渡す。マットが登場するのは笑いと同時発話が頂点に達し、内容に対する所有権が完全に分散した最後の部分においてである。

次のフラグメントでは森で焚き火を作ろうとしたGが薪とタイヤにガソリンをまき、火をつけるが、タイヤが破裂し、炎が燃え上がり、彼の髪が燃え、顔の片側が真っ黒に焼けた、という内容である。

(中略)

- (G) ほんで、俺、何か傷み始めたな、思って。ほんで、やつにゆったんや:「おい、俺、なんかやばいぞ、あっこ、おかんのとこの村行こうや、ゆって」、でもやつは爆笑やねん。俺は最初あれやけど、鏡をみたら自分でもおかしくなってな…
[笑い]
- (G) あほになった、まじで

（B）俺が見たとき、もう、なんじゃ、こりゃ、（ピズダ的）って…
（G）　　まじで
（S）俺が見たときな…まじで（ブリャ（売春婦））…日光浴したんか、
（B）　　これも
（S）焼けすぎた（完全フイ的に）ちゃうかと思って
（B）　　なにゆってんねん、片方だけがどうやって？
（F）何でこんなに焼けるねん、（ブリャ（売春婦））お前…
（X）　　あほになっとった、まじで
（G）なんや、水で…海水浴…
（S）　　夏やったんとちゃうか、あれ
（F）ありえへん、お前、（ブリャ（売春婦））日焼けしすぎやんけ
（C）　　だからゆってんねんか、焼けまくり（完全フイ的に焼けた）ちゅうやつやんけ。

火傷の経験者が事故の描写を終えたあと、笑いのポイントである焼けた顔を描写する権利はそれを実際に見た周りの全員に渡る。このときにはじめて、火傷をした本人も含めて会話者全員と語られる対象との距離が等しくなり、修辞上の平等性が成立する。そこで、同時発話の渦巻きで再びマットが現れる。

マットの言葉は主として感嘆詞だが、事故そのものの描写にはマットが現れず、激しい痛みを表現するときにもGが一般的なロシア語の言葉を力強く発音するだけである。マットが現れるのはやはり語る全員と語られる対象との距離が等しいときに成立する修辞上完全に平等な空間のなかでだけである。

もう一つの会話は同じ公園の中に以前あった橋を会話者がみんなで壊した、という内容である。橋は上に湾曲した二本のパイプからなっており、古くなったためにパイプとパイプの間にあった板が取れ、子供がパイプに乗ってブランコ代わりに使っていたため、橋が最終的に壊れ、その代わりに別の橋が建てられたという物語である。

（S）クラスのやつらみんなそこへがっと…ほんで壊れたんや。
（G）あれはな、あれ、パイプでできとったんや
（F）こんな、でかいパイプやったんや
（G）こうやったのがな、逆に曲がってもうたんや
（Yu）あれは、なんや、パイプ一本やったん？
（F）ちゃう…
（G）二本やった、こんな、両側にな
（Yu）くっついとったん？
（G）ちゃうって、パイプがこうたっていたのがな
（S）　　あれは完璧にピズデツ（壊れていた）だった
（G）…逆に裏返ったんや…なんちゅうんやろ…
（F）　　重量が多すぎたんやブリャチ（売春婦という意味の感嘆詞）

-（A）　ゆれとったんやナフイ
（男性性器に乗れという意味の感嘆詞）
-（F）ほんで、俺らが乗ってあそんどったんや
-（S）そうや、そうや、あそんどった
-（F）とんとん、こう
-（G）今のはしっかりしているわ…豚やったんや、俺ら
-（B）そうやな…
-（P）　ええ橋やった
-（F）　ドイェバリ（壊した（語幹が性交））な、あれは
-（B）俺らの一味がきてな…

このフラグメントには最初から最後まで独占的な語り手は現れず、この場に居合わせた全員が対等に物語に参加する。そして、マットがほぼ会話全体を覆っている。

以上の三つの例から明らかなように、ジリノフスキー氏のインタビューに現れた対面性は偶然的・意図的なものではなく、マットそのものの性質である。ただし、意味論的な平等性というよりも、実際の会話をみているかぎり話題に対する権利の拡散がマットの成立条件である。

筆者が録音した殆どの会話において、マットはこのように内容に対する権利が拡散したときに限って現れた。しかし、例外的なフラグメントが一つだけあった。このフラグメントは前のものと同じ場で録音された一つのまとまった物語である。その内容は長距離運転手のGが調馬師のRとともに草競馬に馬を運ぶときに通りがかった牧畜展覧会で巨大な牛を目にし、感動したというものである。

-（G）展覧会があってん、Rと通りがかってな… 牛がな、まじですごい。1.5トン楽勝で。んで、金玉がな、こんな（手で大きさを示す）
-（S）彼がみたちゅうのがポイントやで
-（G）あれはな、ロープじゃ話にならん。首にとか付けたって引かれへんで、わかる、
-（B）
　鼻やで、
-（G）鼻にこんな、ループを入れてな
-（F）わっかや…
-（G）こんな、わっか、わかるな…
-（Y）ん…
-（G）それをな、鉄のやつで引っ掛けてな、鉄のやつだけやで、まじで、それしかないで、方法は… んで、暴れだしたりとかしたらな、もう一人が走ってきて、もう片方から鉄のやつで引っ掛けるんや。後はあれ、テービ、なんちゅうんや?あれで捕まえて…
-（S）テービ, 鎖やん
-（G）鎖で。俺マジ思ったで、こいつが暴れだしたら、牛舎ごと逃げ出すで。… ほんますごいで、ピズデツ（「膣」という意味のの「ピズダ」に「コネツ」（終わり）の語尾をつけた単語。「終わり」という意味以外にも賞賛や怒りを表現する感嘆詞としても用いられ

ることはこれまでも述べた通りである。）

沈黙

この物語は一貫して（G）によってコントロールされている。実際、（G）以外に、この会話への参加者の中で話題の巨大な牛を見たものは会話の参加者の中にいなかった。にもかかわらず、彼らは三回に渡って会話に参加しようとする。一回目は「鼻やで」という発言で聞き手の（B）が巨大な牛の扱い方を既に知っていることを述べる。さらにウクライナ人の（F）がラトビア人の語り手（G）のロシア語を修正し、鼻に通されるのは「ループ」ではなく、「わっか」だと教える。最後には「鎖」のロシア語が思い出せない（G）にラトビア人の（S）が訳語を提供する。語り手の（G）は三回ともこれらの言葉を繰り返して自分の物語に導入し、いかにも誰にも邪魔されたくない早口で話を続ける。そして、牛舎ごとに逃げ出す牛という感動的なシーンで話を終わらせるのだが、周りが盛り上がる様子はない。そこで、沈黙の中で彼が自分の感動をマットの言葉で表現する。同時発話がなく、内容に対する権利の拡散もないこのフラグメントにおけるマットの使用は明らかに前の構図に収まらない。これをどう考えるべきか。

実際、上の会話がこれで終わったわけではない。沈黙の後に次の二つの発言がなされている：

-（S）ん… 大した演説したな、お前

（さらに沈黙）

-（B）思い出になるわ

対面性の仮説からみたときに例外的にみえた上の「ピズデツ」は筆者の構図に納まらないと同じように、マットを使う言語集団にとってもメタ言語への移動が必要なほど、不適切である。つまりこうだ。上で述べたように、この会話では対面的な空間が成立していない。（G）は物語が終了した後に周りの非言語的な反応をみてそれを察し、マットを使うことで無理やり対面性の空間、みんなが平等な形で参加し、盛り上がる空間を作り出そうとする。だが、沈黙の中で突然鳴り響いた特権的な語り手のマットは聞き手を存在しない対面性の空間に誘うため、失敗に終わるしかない。対面性は一人では作れないからだ。そこで、誘われる聞き手はメタ言語の使用によって、（G）の話はすべて修辞上一人語りであり、みんなで対等に参加しうるマットの空間が成立していないことを容赦なく指摘するのである。

3．3 考察

今まで、マットを「平等性」、「対面的関係」や「直接性」といった概念で形容してきた。これらの概念はウィットゲンシュタインやバフチンの理論の先駆者である宗教学者・哲学者マルティン・ブーバーの「我と汝」の議論［ブーバー 1978（1923）］、さらには彼の議論に依拠したビクター・ターナーの「リミナリティ」と「コムニタス」

[ターナー　1996] の議論を思い起こさせる。ここではそれぞれの議論やそれらに対する批判を詳細に論じるつもりはない。ターナーがブーバーを「社会科学者というよりも才能ある生え抜きのインフォーマント」（ターナー　1996、p.173）として使ったように、筆者もここでコムニタスの議論の科学的な妥当性を問わずに、単に「ヴィ」関係、「ティ」関係、そしてマットの三項がなしうる構図をより把握しやすいものにするために、「コムニタス」と「構造」の二項を使うことにする。

「ヴィ」関係は身分、役割、職務、年齢などの社会的な諸単位を強調するときに使われると行為者が考えるため、大雑把に言えばターナーのいう「構造」に相当する。それに対して構造が強調する諸属性を超えた付き合いの意味合いをもつ「ティ」関係は全人格対全人格の対話に相応しいと実践者が考えるため、「反構造」的な性格をもっている。この分類はあくまで語りの次元にしか当てはまらないことを強調しておきたい。というのも、「ティ」で行われる会話の多くは構造の諸属性を中心に構成されており、また「ヴィ関係」でもブーバーが描く「我・汝」の対話が十分可能である。だが、語りでみる限り「ヴィ関係」が公の、冷たい、事務的、遠いといった形容詞で語られ、それに対して「ティ」関係は私的、暖かい、心のこもった、直接的な、などの会話に相応しいと考えられている。ゆえに、構造：反構造という軸を設定すれば、「ヴィ」が前者の極に、そして「ティ」が後者の極にあたる。

構造的・反構造的という二分法から眺めれば、平等な参加者による直接的な対話にしか現れなかったマットは一見反構造的で、ある主の束の間のコムニタスとして見える。そうだとすれば、マットが常に「ティ」の会話においてしか現れないはずである。そして「ヴィ」関係でマットが現れることはないはずであろう。だが、実際はそうではない。次にマットが罵り言葉として公の場で使われた一つの会話を紹介し、マット関係、「ティ」関係、そして「ヴィ」関係という三項のなす構図を最後に模索しよう。

事例はロシアの有名な歌手、フィリップ・キルコロフが記者会見のときに女性の新聞記者をマットで罵った挙句、彼女を記者会見が行われた会場から追い出したという事件のものである。その後、当の新聞記者が歌手を起訴し裁判沙汰になったが、刑法の見直しが必要と主張したキルコロフの要請に従って、言語学者の検証が行われ、マスメディアでマットの使用が屈辱的かどうかに関する熱烈な討論が行われた。

カバー曲がなぜこれほど多いかと新聞記者に訊かれたキルコロフは「ヴィ」の言い方で次のように応答する。

「あなたに写真をとってほしくないです。あなたの存在が気に触るんです。あなたのそのピンクのブラウスも、おっぱいも、マイクも気に触るんです、分かります？正直いって、あなたが私のことをどう書くかはどうでもいい（フイ叩け）です。あなたのこともそうですし。私は素人が嫌いだし、素人ならここは場違いなんです。私に帰ってほしいんですか。私は帰りません。あなたの同僚を尊敬し

ているから帰りません。あなたが帰ればいいです。はい、もういい、帰れよ。スターに会いに記者会見にくる記者は準備して来ないとだめです。あなたみたいに、昨日そこらへんの裏通りをうろちょろして、今日はここの二列目は常識はずれなんですよ。さよなら。」

このフラグメントで興味深い点は二つある。一つはマットの「フイ叩け」（どうでもよい）が現れる場所だが、歌手は相手の存在そのものが気に触るという主張のときにマットを使う。次に素人対プロの対比でキルコロフが相手を追い出すための論理的な基盤を構築しようとするときにはマットは現れない。一対一の対話だけでマットが現れ、社会の常識に訴えるときには現れないという意味において、ここにも上で提示したものと同じ構図があるといえる。マットが罵倒の機能をしたときにも規約の世界が会話から一旦排除される。「お前を起訴する」、あるいは「お前のやったことを上司にいう」といった脅しにはマットが現れないはずだ。相手の行為を批判する基盤は共同体の成員が共有する制度や常識ではなく、あくまで単なる一個人の非常に強い反発意見であるだろう。最初に紹介した言語学オリンピックの問題でも、トラックの運転手は相手の行為を交通違反として位置づけず、法的な手続きで相手を脅かしたわけでもない。そういった言動にはマットの入る余地がおそらくないからだ。「例のない汚い悪態」としてマットが認識されるのも、それが規約的な領域の外にあるからに違いない。マットを浴びさせるときには勝負は「我」対「汝」となる。だが、ここの汝が「ティ」ではなく、「ヴィ」として登場しているのはなぜか。

この問題、つまり「ヴィ」関係においてもマットが出現しうるところが上のフラグメントの二つ目の興味深い点である。マットが使われる文そのものは構造、すなわち「新聞記者」と「スター」、「素人」と「プロ」からなるここでの構造からは逸脱していることは上述した通りである。そのため、ここにも「我・汝」の世界が成立しており、そこならマットが現れるのは当然だといってもいいかもしれない。だが、この説明は一つの問題をのこす。

「ヴィ」の会話において全人格的な対話の空間が成立した上で強い同意の瞬間が生じたとしても、そこにはマットが出現することはない。相手の全人格の否定が行われるときに限って、マットが形式的な言葉の中で響きうる。そこで礼儀的な流れは確かに裂かれるが、の裂け目から対等な「ティ」の世界が除くのではない。「ヴィ」の基盤である構造的諸属性が外れると同時に、これまでの二人の関係を根本から見直すメタ言語的で獰猛な戦いとなるか、打ち切られるかしかない。そのため、「ヴィ関係」でのマットは「ティ関係」への移動を意味せず、質的に異なった破壊的な作用を持つ。ゆえに、マットは構造的な空間とも、反構造的な空間とも異なった第三の項であると考えても妥当である。

マットの世界とは何か。マットは規約を排除し、修辞上平等な世界を作り出すが、その世界は決して対話性の世界ではない。マットの世界では二つの関係性しか存在し得ない。一つは会話者同士の完全な一致、つまり、修辞上平等な参与者による世界創出である。そ

してもう一つは社会の介入が不可能な、極端な対立である。二つが普段経験される人間関係から極端に逸脱していることは言うまでもない。この極端な逸脱の領域が可能性として常に「ティ」関係にも「ヴィ」関係にも接続されていると筆者は思う。マットを知る人同士のいかなる会話もマットの世界に移行する可能性をもっており、その逸脱的な世界の存在はマットが現れない会話にもある種の緊張をもたらしている。その緊張とは集団に完全に飲み込まれたときの快楽の予感であったり、または相手との極端な対立の恐怖であったりする。それと同時に、マットの存在はさほど極端でない世界の領域の恣意性を明示するものでもある。

終わりに

最後にブルトニエキ村で聞いた一つのアネクドートを紹介したい。このアネクドートはキルコロフの発言にも現れた「ポフユ」、つまり「どうでもいい」「（直訳すれば「フイ叩け」だが）という言葉を中心に構成されている。以下がその訳文である。

あるホテルでフイ叩け連盟の会議が行われ、連盟長が記者会見で記者の質問に答えている。

記者：連盟長、本当に全部がフイ叩けですか？

連盟長：フイ叩けです。

記者：金もですか？

連盟長：金もフイ叩けです。

記者：酒もですか？

連盟長：酒も。

記者：女も？

連盟長：いや、女なら話は別。

記者：ちょっと矛盾していませんか。あなたはフイ叩け連盟長じゃないですか。

連盟：連盟なんて、フイ叩けですわ。

自己言及のパラドックスに似たこのアネクドートでは一旦エスタブリシュメントが否定された後、その否定もさらに否定される。この二重の否定、構造も反構造も超越する非社会性にこそ、マットの発話内の力がある。

参考文献

Mokijenko V. 1994 Russkaja Brannaja Leksika: Zenzurnoje I Nezenzurnoje *Russistika* Berlin 1/2. pp.50-73.

Levin Y. 1988 Ob Obszennih Virazeniyah Russkogo Yazika in Levin Izbrannije Trudi. Poetika Semiotika. Moskva pp. 809-819.

Uspenskij B. 1994 Mifologicheskij Aspect Russkoj Eksperrivnoj frazeologii in Uspensij B. Izbrannije Trudi Vol.2 Yazik I Kultura. Moskva pp.53-128.

ブーバー M. 1981 (1923)『我と汝・対話』田口義弘訳 みすず書房。

ターナー V. 儀礼の過程 1996 新思索社

通信社レグナム 2004 ネット上常時公開ニュースページ http://www.newspb.ru/allnews/22013/

本論稿の基盤となる調査は、21世紀COEプログラム「トランスナショナリティ研究プロジェクト」の助成をえて初めて可能となった。この場をかりて感謝申し上げたい。

Transnational Obscenities :
- Rhetorical Space of Russian Unquotable Language "Mat" : An Anthropological Study

Okamoto Yura

The purpose of this paper is to clarify the pragmatics of Russian obscene language, "mat", and to redefine its illocutionary force by discovering the characteristics of the context it is used in. Mat is a distinct and extremely large layer outside generally permitted Russian language, layer that has penetrated languages of all members of the old Soviet State as well as Mongolia and China. Its use in the Soviet period as well as before it was strongly persecuted; mat in Russian mass-media as well as in science was completely nonexistent and even now scientific work on mat is still scarce.

Mat is thought to have been used as ritual language in pre-Christian cults, so its use in daily life was tabooed. Following the advent of Christianity, mat was condemned as a remnant of pagan beliefs. Today mat is generally thought to be a repressed rhetoric, used to express repressed feelings or simply to be a group of extremely strong (and so largely non-translatable) swear-words. This common belief is also widely accepted in scientific papers.

This paper analyses one interview of a Russian politician and several fragments of conversation of an ethnically mixed group of Latvian villagers and argues, that illocutionary force of mat should be completely reformulated. Far from being a mere expletive, mat constructs a unique rhetorical space, where participants in the conversation are completely equal as to their connection to the topic, where societal norms are excluded and where individuals, evidently stripped of their societal garments and rights engage in a game of complete unison or a battle of just as complete mutual negation.

Key Words

obsceneties, illocutionary force, rhetorics, conversation analysis, "mat"